

(2) 久慈川の生物

1) 久慈川の植物

久慈川は全川の的に農耕地としての利用が多くみられ、耕作放棄地にはセイタカアワダチソウ、アレチウリ等の外来種の侵入が顕著にみられる。また、下流域では公園・グラウンド利用等も多くなっている。

また、中流域の高水敷にはマダケの水害防備林が全国有数の規模で残っており、久慈川の河川景観の大きな特徴となっている。タケ類はもともと繁殖力が強い上に、近年では竹林の管理がされなくなったため、生育域が拡大している。

水際線には湿地等の環境も多く見られるが、乾燥化したり、分断化される傾向にあり、連続性が失われつつある。しかし、粟原から上流域には、まとまったヨシ原が形成され、良好な環境が比較的維持されている。

全川をとおしては、冠水頻度の高い高水敷や水際線では、比較的自然度が高い植生が維持されているが、河原に依存する植物は減少傾向にある。

表 6-1 久慈川で見られる主な植物

水 域	水際線	河 原	冠水頻度の 高い高水敷	冠水頻度の 低い高水敷	河辺林の構成種
ヒシ	ミソソバ	オオイヌタデ	サクラタデ	草本類	ヤナギ類
キクモ	ハンゲショウ	カワラナデシコ	ヤナギタデ	コウヤワラビ	アカメヤナギ
ホザキノフサモ	<u>オランダガラシ</u>	カワラアカザ	<u>カワチシヤ</u>	イタドリ	カワヤナギ
<u>フサモ</u>	セリ	カワラケツメイ	サデクサ	ハナタデ	コゴメヤナギ
<u>コカナダモ</u>	ヘラオモダカ	カワラハハコ	ミソハギ	アブラナ	タチヤナギ
エビモ	サジオモダカ	カワラヨモギ	チョウジタデ	メドハギ	イヌコリヤナギ
	オモダカ	ツルヨシ	<u>ネズミムギ</u>	<u>オオブタクサ</u>	オノエヤナギ
	<u>ミスアオイ</u>		イ	ユウガギク	ネコヤナギ
	キショウブ		オギ	<u>セイタカアワダチソウ</u>	広葉樹(高木)
	<u>キシユウスズメノヒエ</u>			コヌカグサ	ヤマハンノキ
	クサヨシ			カゼクサ	ハンノキ
	ヨシ			ススキ	シラカシ
	マコモ			つる植物	ムクノキ
	<u>ミケリ</u>			イシミカワ	エノキ
	<u>タコノアシ</u>			カナムグラ	ケヤキ
	ヒメガマ			ツルマメ	<u>ハリエンジュ</u>
	ガマ			クズ	アカメガシワ
	コガマ			<u>アレチウリ</u>	ネムノキ
	ホタルイ				広葉樹(低木)
	ヌマガヤツリ				シロダモ
	マツカサススキ				ヒサカキ
	カンガレイ				ヌルデ
	サンカクイ				竹笹類
	ウキヤガラ				マダケ
					<u>モウソウチク</u>
					アズマネザサ
					メダケ

注1) 平成9年度河川水辺の国勢調査(植物調査)をもとに作成

注2) _____ は、外来種。

注3) は、保全上重要な植物種(環境庁レッドデータブック植物(2000)掲載種、

または茨城県版レッドデータブック<植物編>(1999)掲載種)。

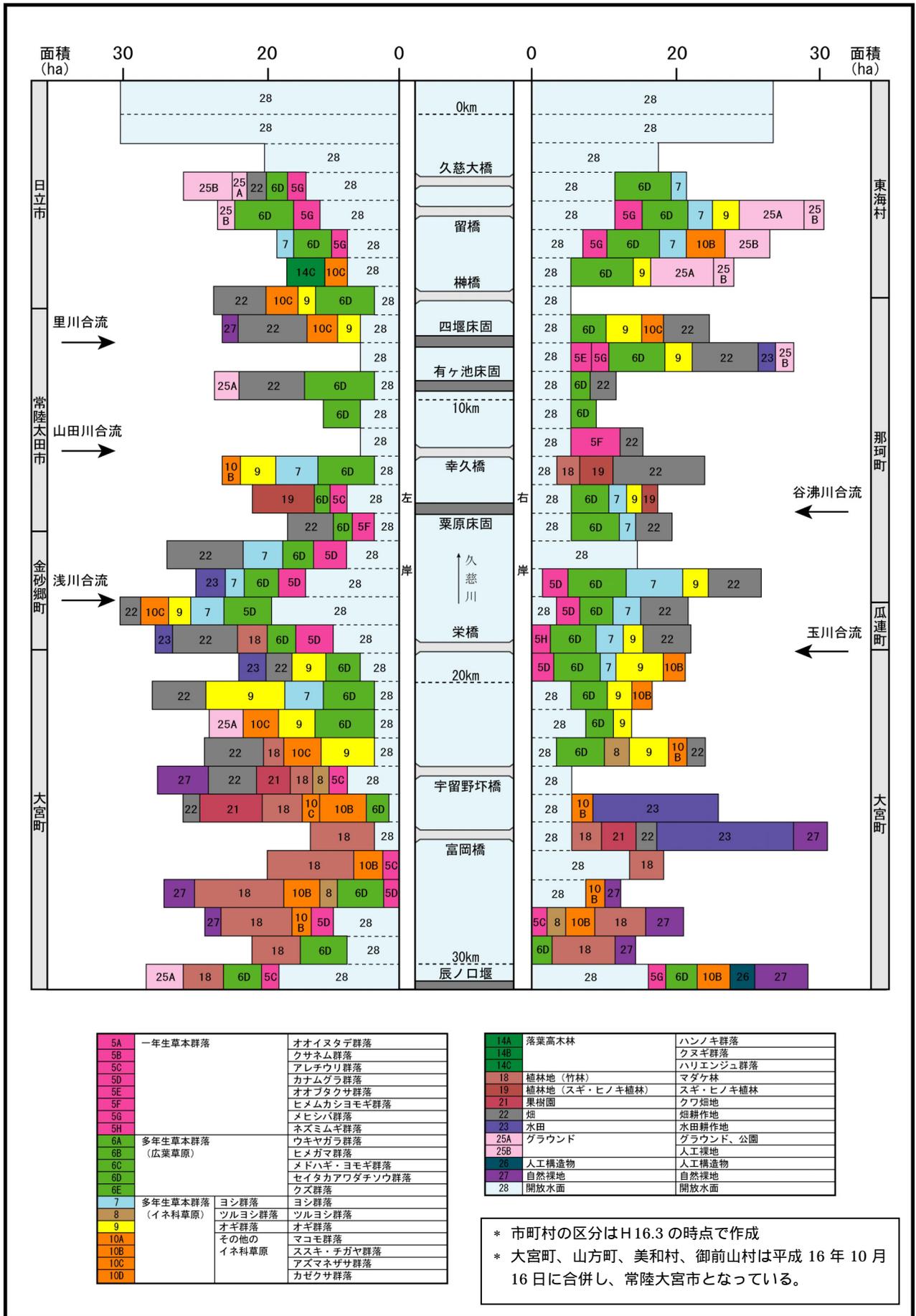


図 6-4 久慈川本川 1kmピッチ植生群落図

表 6-2 直轄管理区間内の植生群落面積集計表

単位：ha

基本分類	群落名	久慈川		山田川		里川	
浮葉植物群落	ヒシ群落	0.50	0.08%	0.00	0.00%	0.00	0.00%
砂丘植物群落	コウボウシバ群落	0.06	0.01%	0.00	0.00%	0.00	0.00%
一年生草本群落	オオイヌタデ群落	2.41	0.37%	0.52	0.87%	0.15	0.22%
	クサネム群落	0.79	0.12%	0.26	0.43%	0.00	0.00%
	アレチウリ群落	11.36	1.73%	0.86	1.44%	3.84	5.64%
	カナムグラ群落	23.71	3.62%	6.49	10.85%	3.87	5.68%
	オオブタクサ群落	3.47	0.53%	0.06	0.10%	0.31	0.46%
	ヒメムカシヨモギ群落	9.02	1.38%	0.51	0.85%	0.69	1.01%
	メヒシバ群落	19.74	3.01%	3.34	5.59%	3.46	5.08%
	ネズミムギ群落	5.45	0.83%	4.91	8.21%	4.09	6.01%
	多年生草本群落 (広葉草原)	ウキヤガラ群落	0.23	0.03%	0.00	0.00%	0.00
ヒメガマ群落		0.27	0.04%	0.00	0.00%	0.00	0.00%
メドハギ・ヨモギ群落		1.71	0.26%	0.02	0.03%	0.15	0.22%
セイタカアワダチソウ群落		121.26	18.49%	6.67	11.16%	8.89	13.06%
クズ群落		3.80	0.58%	2.60	4.35%	3.69	5.42%
イネ科草原(ヨシ)	ヨシ群落	35.85	5.47%	1.19	1.99%	0.54	0.79%
イネ科草原(ツルヨシ)	ツルヨシ群落	19.46	2.97%	4.78	7.99%	2.37	3.48%
イネ科草原(オギ)	オギ群落	50.03	7.63%	3.85	6.44%	4.49	6.59%
イネ科草原 (その他の広葉草原)	マコモ群落	0.47	0.07%	0.00	0.00%	0.00	0.00%
	ススキ・チガヤ群落	36.58	5.58%	1.90	3.18%	0.99	1.45%
	アズマネザサ群落	28.39	4.33%	3.99	6.67%	2.13	3.13%
	カゼクサ群落	1.39	0.21%	0.19	0.32%	0.15	0.22%
ヤナギ低木林	タチヤナギ群落	6.25	0.95%	0.12	0.20%	0.13	0.19%
ヤナギ高木林	タチヤナギ高木林	0.32	0.05%	0.00	0.00%	0.00	0.00%
その他の低木林	ヌルデ群落	0.51	0.08%	0.00	0.00%	0.00	0.00%
落葉高木林	ハンノキ群落	0.29	0.04%	0.00	0.00%	0.00	0.00%
	クヌギ群落	1.23	0.19%	0.37	0.62%	1.45	2.13%
	ハリエンジュ群落	4.32	0.66%	0.59	0.99%	0.16	0.24%
植林地(竹林)	マダケ林	56.84	8.67%	4.36	7.29%	4.54	6.67%
植林地(スギ・ヒノキ植林)	スギ・ヒノキ植林	10.39	1.58%	0.02	0.03%	1.14	1.67%
植林(その他)	植栽樹群	1.46	0.22%	0.00	0.00%	0.00	0.00%
果樹園	クワ畑他	10.67	1.63%	0.00	0.00%	0.71	1.04%
畑	畑耕作地	79.41	12.11%	0.48	0.80%	10.69	15.70%
水田	水田耕作地	27.62	4.21%	1.31	2.19%	3.16	4.64%
人工草地	人工草地	0.22	0.03%	0.00	0.00%	0.00	0.00%
グラウンド	グラウンド、公園	17.59	2.68%	0.00	0.00%	0.00	0.00%
	人工裸地	20.90	3.19%	0.00	0.00%	1.51	2.22%
人工構造物	人工構造物	11.62	1.77%	8.18	13.68%	3.10	4.55%
自然裸地	自然裸地	30.10	4.59%	2.22	3.71%	1.68	2.47%
合計(開放水面除く)		655.67		59.79		68.08	

色付は優占10種

表 6-3 久慈川の植物群落 優占上位10種

群落名	久慈川	群落名	山田川	群落名	里川
セイタカアワダチソウ群落	18.49%	人工構造物	13.68%	畑耕作地	15.70%
畑耕作地	12.11%	セイタカアワダチソウ群落	11.16%	セイタカアワダチソウ群落	13.06%
マダケ林	8.67%	カナムグラ群落	10.85%	マダケ林	6.67%
オギ群落	7.63%	ネズミムギ群落	8.21%	オギ群落	6.59%
ススキ・チガヤ群落	5.58%	ツルヨシ群落	7.99%	ネズミムギ群落	6.01%
ヨシ群落	5.47%	マダケ林	7.29%	カナムグラ群落	5.68%
自然裸地	4.59%	アズマネザサ群落	6.67%	アレチウリ群落	5.64%
アズマネザサ群落	4.33%	オギ群落	6.44%	クズ群落	5.42%
水田耕作地	4.21%	メヒシバ群落	5.59%	メヒシバ群落	5.08%
カナムグラ群落	3.62%	クズ群落	4.35%	水田耕作地	4.64%

注) 色付は、外来種を示す。

(「河川水辺の国勢調査(平成9年度植物調査)」をもとに作成)

河川を特徴づける植物

久慈川を特徴づけている植物としては、水害防備林を構成するマダケ、メダケ等が筆頭にあげられる。マダケ、メダケ等については河川という環境に依存している植物ではなく、もともと植栽されたものである。

河川という出水による攪乱の影響を受ける環境でのみ生育が可能な植物を、河川を特徴づける植物とし、その中から久慈川で見られる草本類をあげれば、カワラハハコ、カワラヨモギ、カワラケツメイなどが着目される。これら植物は、洪水による攪乱によってその生育が維持されている植物である。

また、河川を特徴づける木本類としてはヤナギ類があげられ、久慈川においてはアカメヤナギ、カワヤナギ、ネコヤナギ、イヌコリヤナギ、オノエヤナギ、コゴメヤナギ、タチヤナギの7種類のヤナギが確認されているが、まとまった群落を形成している地点は比較的少ない。



写真提供:奥田重俊氏
カワラハハコ (キク科)

< 生育環境 >

主として川の上流から中流域の、平時は乾燥し、洪水時には冠水する礫質の河原に生育する。



写真提供:奥田重俊氏
カワラヨモギ (キク科)

< 生育環境 >

河原や海岸の日光の照りつける砂地に生える。また、カワラノギク、カワラサイコなどと混生する。



写真提供:奥田重俊氏
カワラケツメイ (マメ科)

< 生育環境 >

日当たりの良い河原の乾いた砂礫地や道ばた、草地などに生える多年草。



写真提供:奥田重俊氏
カワヤナギ (ヤナギ科)

< 生育環境 >

河川の中流から下流域にかけての泥湿地に比較的かたまって生育する。氾濫時の流路跡の、開けた裸地などに多い。



写真提供:池田 正氏
ネコヤナギ (ヤナギ科)

< 生育環境 >

河川の上流から中流域の河床の岩地間隙や砂礫地に群生する。他のヤナギ群落に比べると、貧栄養地に発達している。



写真提供:奥田重俊氏
オノエヤナギ (ヤナギ科)

< 生育環境 >

山地または原野の礫地や河原などに広く生育する。

久慈川における帰化植物

帰化植物とは、明治維新以降に日本に入ってきた外国産の植物である。わずか140年あまりで久慈川では22.2%、山田川では21.9%、里川では25.4%（直轄管理区間内の植生群落面積割合）が帰化植物で占められている。

河川は、毎年の出水により生育個体が掃流され裸地となった後は、帰化植物にとって侵入しやすい環境となる。

久慈川に大規模に侵入している帰化植物としては、セイタカアワダチソウ、ネズミムギ、アレチウリ、シナダレスズメガヤなどが挙げられる。



写真提供：奥田重俊氏

外来種：セイタカアワダチソウ
（キク科）

< 生育環境 >

土手、荒れ地など比較的乾燥した高水敷に生育する多年草。

（原産）北米



写真提供：奥田重俊氏

外来種：アレチウリ（ウリ科）

< 生育環境 >

河原の泥地や土手など、平地の日当たりの良い、開けた荒地に生育し、地面を覆い尽くすように繁茂する。

（原産）北米



写真提供：奥田重俊氏

外来種：ネズミムギ（イネ科）

< 生育環境 >

路傍、空き地、植栽法面などに生育する越年草。

（原産）欧亜大陸

保全上重要な植物

直轄管理区間を対象として実施されている平成9年度河川水辺の国勢調査(植物調査)で確認された保全上重要な植物は、以下に示す13種である。このうち11種が湿地環境に生育する植物であり、この状況からも久慈川沿川における湿地環境の保全は重要であると考えられる。

表 6-4 河川水辺の国勢調査(植物調査)で確認された保全上重要な植物

科名	種名	選定根拠
ツツラフジ科	コウモリカズラ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物<植物編>」 危急種
ユキノシタ科	タコノアシ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物<植物編>」 希少種 「日本の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータブック)植物 改訂版」 絶滅危惧 類
ミソハギ科	ミズキカシグサ	「日本の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータブック)植物 改訂版」 絶滅危惧 IB 類
アリノトウグサ科	フサモ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物<植物編>」 危急種
ゴマノハグサ科	カワヂシャ	「日本の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータブック)植物 改訂版」 準絶滅危惧種
キク科	アキノハハコグサ	「日本の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータブック)植物 改訂版」 絶滅危惧 IB 類
オモダカ科	アギナシ	「日本の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータブック)植物 改訂版」 準絶滅危惧種
ヤマノイモ科	ニガカシュウ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物<植物編>」 希少種
ミズアオイ科	ミズアオイ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物<植物編>」 危急種 「日本の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータブック)植物 改訂版」 絶滅危惧 類
イネ科	コゴメカゼクサ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物<植物編>」 希少種
ミクリ科	ミクリ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物<植物編>」 危急種 「日本の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータブック)植物 改訂版」 準絶滅危惧種
カヤツリグサ科	アワボスゲ カンエンガヤツリ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物<植物編>」 希少種 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物<植物編>」 危急種 「日本の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータブック)植物 改訂版」 絶滅危惧 類

注) は、主に湿地環境に生育する植物。

環境庁レッドデータブックは平成12年7月に公表された植物(維管束植物)編を使用。

茨城県版レッドデータブックは平成9年3月に刊行された植物編を使用。



写真提供: 宮脇成生氏
ミズアオイ科
ミズアオイ

環境省 RDB
絶滅危惧 類
茨城県 RDB
危急種

沼や溝、水田に生えるほか、栽培もされる一年草。県南部の池・沼やハス田に生育している。



写真提供: 奥田重俊氏
ミクリ科
ミクリ

環境省 RDB
準絶滅危惧
茨城県 RDB
危急種

各地の池沼や水路、水湿地などの浅い水中に群生する多年草。泥底の浅い水中から直立する。



写真提供: 奥田重俊氏
カヤツリグサ科
カンエンガヤツリ

環境省 RDB
絶滅危惧 類
茨城県 RDB
危急種

河畔や湖岸の湿地に生える大型の一年草。叢生して大きな株となる。茨城県内に点々と数カ所の生育地が知られている。



写真提供: (財) 埼玉県生態系保護協会
カヤツリグサ科
アワボスゲ

環境省 RDB
茨城県 RDB
希少種

山麓や低地の湿地、河畔湿原などに生育する多年草。茨城県北部から南部の山地に数ヶ所の生育地が知られている。

イネ科
コゴメカゼクサ

環境省 RDB
茨城県 RDB
希少種

低地の湿地に生育する一年草。河原の裸地に生える。

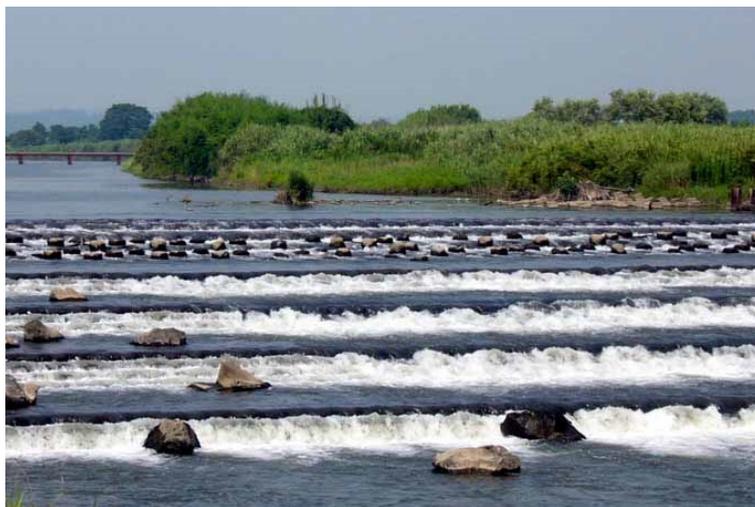
2) 久慈川の魚類

アユやサケの遡上することで知られる久慈川(久慈川水系)には数多くの魚達が見られる。阿武隈淡水動物研究会によって1986年から行われている魚類調査では、2002年現在までに29科85種の魚類が確認された。このうち在来種は65種(全体の76.5%)で、主にコイ科やハゼ科の魚種数が多い。確認した魚種数が多いのは、久慈川が淡水域だけでなく、海との接点である河口に汽水域を持っていることによる。ここではボラやスズキだけでなく、特に初夏から秋にかけてはコトヒキやシマイサキなどの海魚をみることができる。調査は継続中であるが、今後の調査によってはコイ科の国内外来種や、河口域では新たな海魚が採集される可能性があり、確認種は今後増加するものと思われる。

分布上珍しい種や貴重な種としては、関東地方の分布としては最も標高の低い場所に生息している在来のイワナや、北方系の降海型イトヨ、分布の北限に近いボウズハゼなどがみられる。また、茨城県内において減少しており、久慈川水系においても減少傾向にある種として、スナヤツメやカワヤツメ、キンブナ、ヤリタナゴやタナゴなどの在来タナゴ類、ホトケドジョウ、ギバチ、メダカ、オオヨシノボリ、ジュズカケハゼ、シロウオ、陸封型カジカ、回遊型カジカなどがあげられる。

しかし現在の久慈川では、人的に移植されて分布を広げた魚が非常に多くなっている。中流域や支流では中部地方以西原産のオイカワやカワムツ、ヌマムツが、流域の溜池では北アメリカ原産のオオクチバス(ブラックバス)やブルーギルが増加した。また、近年では釣人のために放流されるイワナやヤマメ、愛好家によって放流されるメダカやタナゴ類が多くなった。これらにより、同じ種類の魚であっても「久慈川水系の魚達の持つ独自の色彩や模様を決めている遺伝子が攪乱されてしまう」という危険性がある。

今後は、現在残る久慈川の姿を大切に、魚だけでなく多くの生き物の住める川について考えていく必要がある。



日本初のプールを持った粟原床固の全断面魚道

表 6-5 久慈川で確認された魚類

No	目名	科名	種名	備考
1	ヤツメウナギ目	ヤツメウナギ科	カワヤツメ	
2			スナヤツメ	
3	ウナギ目	ウナギ科	ウナギ	
4	ニシン目	ニシン科	サッパ	
5			コノシロ	
6	コイ目	コイ科	ギンブナ	
7			キンブナ	
8			ゲンゴロウブナ	国内外来種
9			コイ	
10			タナゴ	
11			タイリクバラタナゴ	国外外来種
12			ヤリタナゴ	
13			ハクレン	国外外来種
14			ハス	国内外来種
15			オイカワ	国内外来種
16			カワムツ	国内外来種
17			ヌマムツ	国内外来種
18			ソウギョ	国外外来種
19			アブラハヤ	
20			マルタ	
21			ウグイ	
22			モツゴ	
23			ビワヒガイ	国内外来種
24			タモロコ	国内外来種
25			ツチフキ	国内外来種
26			ニゴイ	
27			カマツカ	
28			スゴモロコ	国内外来種
29		ドジョウ科	シマドジョウ	
30			ドジョウ	
31			ホトケドジョウ	
32			フクドジョウ	国内外来種
33	ナマズ目	ギギ科	ギバチ	
34		ナマズ科	ナマズ	関東の個体は移殖との説有
35	サケ目	キュウリウオ科	ワカサギ	
36		アユ科	アユ	
37		シラウオ科	シラウオ	
38		サケ科	サケ	
39			サクラマス(ヤマメ)	
40			ニジマス	国外外来種
41			ブラウントラウト	国外外来種
42			イワナ	
43	トゲウオ目	トゲウオ科	降海型イトヨ	
44	ボラ目	ボラ科	セスジボラ	
45			メナダ	
46			ボラ	
47	ダツ目	メダカ科	メダカ	
48		サヨリ科	クルマサヨリ	
49			サヨリ	
50	カサゴ目	コチ科	コチ	
51		カジカ科	アユカケ	国内外来種
52			陸封型カジカ	
53			回遊型カジカ	
54	スズキ目	スズキ科	スズキ	
55		サンフィッシュ科	ブルーギル	国外外来種
56			オオクチバス(ブラックバス)	国外外来種
57		ヒイラギ科	ヒイラギ	
58		タイ科	クロダイ	
59		シマイサキ科	シマイサキ	
60			コトヒキ	
61		イソギンボ科	イソギンボ	
62		ハゼ科	ボウズハゼ	
63			シロウオ	
64			ミズハゼ	

No	目名	科名	種名	備考		
65	スズキ目	ハゼ科	アゴハゼ			
66			ピリンゴ			
67			ジュズカケハゼ			
68			ウキゴリ			
69			スミウキゴリ			
70			マハゼ			
71			アシシロハゼ			
72			ヒメハゼ			
73			アベハゼ			
74			スジハゼ			
75			シマヨシノボリ			
76			オオヨシノボリ			
77			トウヨシノボリ			
78			シモフリシマハゼ			
79			ヌマチチブ			
80				タイワンジョウ科	カムルチー	国外外来種
81			カレイ目	ヒラメ科	ヒラメ	
82				カレイ科	イシガレイ	
83					ヌマガレイ	
84	フグ目	カワハギ科	カワハギ			
85		フグ科	クサフグ			

1. この目録では、1986～2002年の阿武隈淡水動物研究会の調査によって久慈川本流とその支流、そして流域の水路、溜池等で確認した魚種を中心とし、河口域で確認した海魚についても含めてとりまとめた。

2. 和名は、環境庁(1997)「種の多様性調査(動物分布調査)対象種一覧 淡水魚類」にしたがったが、これに記載のない種(海水魚等)については、岡村収・尼岡邦夫(編・監修)(1997)「日本の海水魚」(山と溪谷社)や中坊徹次(編)(2000)「日本産魚類検索全種の同定 第二版」に従った。

(稲葉修氏調査結果をもとに作成)

上流域に多い魚たち

茨城・福島・栃木の3県にまたがる八溝山に水源を持つ久慈川は、多くの支流を合流させる。これらの支流の上流部はいずれも山間部を流れる溪流であり、ここでは魚種数は少ないものの、サケ科の溪流魚が生息している。かつて福島県側の支流にまで遡上したサクラマスは現在では少なくなりましたが、流域の民家には当時をしのばせる漁労具が残されている。



写真提供: 稲葉 修氏

イワナ (サケ科)

河川上流に生息する個体は全長30cm前後に成長する。水生昆虫の幼虫や水面に落ちた昆虫、小動物を食べる。産卵期は秋。久慈川水系では一部の支流の源流部にのみ在来個体がみられるが、数は少ない。現在では多くの支流に養殖された他水系産のイワナが放流されている。写真は放流された個体。



写真提供: 稲葉 修氏

ヤマメ (サケ科)

サクラマスの河川陸封個体で、全長は30cm前後。水生昆虫の幼虫や水面に落ちた昆虫などを食べている。産卵期は秋。イワナよりも下流側に生息するが、久慈川水系の支流では在来イワナの分布域が限られているため、多くの沢で源流部にまで生息している。



写真提供: 稲葉 修氏

アブラハヤ (コイ科)

全長は14cm前後。河川上流域の、河川勾配が緩やかになる辺りから中流域にかけての淵や淀みに多い。雑食性。産卵は春から初夏にかけて行われる。久慈川水系では中流域より上流にみられるほか、比較的支流に多い。久慈川流域では「ニガサコ」や「ニガッペ」と呼ばれている。



写真提供: 稲葉 修氏

陸封型カジカ (カジカ科)

全長15cm前後。河川上流域から中流域の瀬に生息するが、主に上流域の沢に多い。水生昆虫や他種の幼魚を食べている。産卵は早春から始まり、瀬の石の下に卵を産む。久慈川水系では支流となる沢に生息するが、近年は環境の変化で減少している。遺伝子保護の面からも、他水系産の個体を放流することなく、その場所ごとの在来個体を保全する必要がある。

中流域に多い魚たち

久慈川は中流域の区間が長く、ここでは多くの支流が合流して水量が増え、次第に大きな流れになっていく。また、水温も上昇していき瀬や淵が交互にあらわれて、魚種数やその個体数が多くなっていく。アユやサケの遡上が確認でき、漁をする人だけでなく、釣人や行楽に訪れる人々も多い。



写真提供: 稲葉 修氏

アユ (アユ科)

全長は大きな個体で 30 cm ほどになる。稚魚は、春になると川を遡上し、中流域で成長する。産卵は秋に行われ、一部の個体は冬を越すが、多くの個体は一年で一生涯を終える。久慈川水系では、本流だけでなく多くの支流に遡上個体がみられる。茨城県側では毎年 6 月にアユ釣が解禁となり、多くの釣人で川が賑わう。



写真提供: 稲葉 修氏

ウグイ (コイ科)

全長約 30 cm。生活の違いによる淡水型と降海型がみられるが、久慈川中流域に生息するのは淡水型と思われる。産卵は 4 ~ 5 月に瀬の砂礫底で行われ、この時期の婚姻色のでた個体は「アイソ」と呼ばれている。この産卵行動を利用した「アイソ漁」は久慈川の初夏の風物詩のひとつとなっている。



写真提供: 稲葉 修氏

オイカワ (コイ科)

全長は最大で 16 cm ほど。河川中流域の平瀬に多い。はっきりとした年代はわからないが、久慈川水系へは他種の魚類の放流にともなって侵入した外来種である。現在では本流だけでなく、支流の多くや流域の水路や溜池でも普通にみられるようになった。本種は環境や水質の悪化した河川においても繁殖することが知られている。



写真提供: 稲葉 修氏

カマツカ (コイ科)

全長 20cm ほどに成長する。河川中流域から下流域の砂地に多い。久慈川水系では、本流の中流域で確認できるほか、浅川や山田川、里川などの支流にも多い。驚くと砂の中に潜り、目だけを出している。久慈川流域では「カワギス」などと呼ぶ人もいるが、支流となる里川流域では「ドンガンボ」や「バカッチョ」などとも呼ばれ、川遊びをする子供たちや釣り人に親しまれている。



写真提供:稲葉 修氏

ニゴイ(コイ科)

全長 55 cm前後に成長する。中流域から下流域に多く、久慈川では特に中流域で姿を見ることが多くなってきた。水生昆虫や藻類の他、他種の幼魚や卵をも食べてしまうことがある。産卵は砂礫底で行われている。久慈川流域では「サイ」と呼ばれている。



写真提供:稲葉 修氏

シマドジョウ(ドジョウ科)

全長は 14cm になるドジョウの仲間であるが、関東地方では小型の個体が多いとされている。久慈川水系から確認した個体も、全長 10cm 以下の個体が多かった。

口ひげは 3 対(6 本)である。河川では、特に中流域の砂礫底に多く、小型の水生昆虫などを食べている。久慈川本流だけでなく、多くの支流にもみられ、「スナハギ」や「スナモグリ」などと呼ばれている。



写真提供:稲葉 修氏

シマヨシノボリ(ハゼ科)

全長は約 8 cm ほど。久慈川では中流域の瀬に多い。産卵は初夏で、卵は石の裏に産み付けられる。孵化した仔魚は海に降りて生活し、全長 2 cm ほどになると川を遡上してくる。久慈川流域では、オオヨシノボリと共に「サラカジカ」や「へボカジカ」と呼ぶ人もいる。



写真提供:稲葉 修氏

ウキゴリ(ハゼ科)

全長 13cm 前後に成長するハゼ科の魚。河川中流域から下流域と、その流域の溜池や湖沼などに生息する。川の中では淵やよどみに多い傾向がある。

久慈川流域では中流域から下流域にかけてと、流域の池や沼などに生息している。

下流域や汽水域に多い魚たち

120 km以上にわたって流れてきた久慈川も、日立市南部で太平洋へと注ぎ旅を終える。中流域に比べると下流の区間は短いが、ここでは淡水と海水が混じり合う汽水域がみられ、海魚もみられるようになる。ここは海と河川を行き来する多くの生物が通過する地点であり、山と海の恵みが行き交う大切な場所でもある。



写真提供:稲葉 修氏

コイ (コイ科)

全長は 1m 近くになる。日本各地に分布するが、古くからの移殖によって国内の自然分布域は不明とされる。産卵は春から初夏に岸辺の水草等のある場所で行われる。

久慈川水系では、主に中流域から下流域にかけて広い範囲に生息し、本流だけでなく多くの支流にも見られる。また、流域の溜池に釣り人や釣り団体によって放流されることも多い。



写真提供:稲葉 修氏

ボラ (ボラ科)

全長 60cm ほど。日本各地に分布する。未成魚や成魚は河口付近に多く、中流域に姿をあらわすこともある。

久慈川本流では下流域から河口に多いが、堰などのない時代は、常陸大宮市富岡あたりにまでやってきた個体が見られたという。久慈川河口では、ボラの他にもよく似た魚としてメナダやセスジボラも確認できる。



写真提供:稲葉 修氏

スズキ (スズキ科)

全長は 1m になる。日本各地の外洋や沿岸域に分布するが、未成魚や成魚は河川中流域にまで姿をあらわす。中流域にまでやってくる個体は、アユなどを追って遡上しているようである。

久慈川では、ボラと同様にかつては常陸大宮市富岡付近にまでやってきた個体が見られたというが、現在は確認できない。下流域や河口に多く、その豪快な引きから、釣り人にも人気がある魚である。



写真提供:稲葉 修氏

コトヒキ (シマイサキ科)

全長 30cm ほどになる。主に中部地方以南の沿岸域に多いとされているが、茨城県の沿岸にも見られる。汽水域を好み、特に幼魚は河川河口で確認することができる。

久慈川では、夏季になると下流域や河口に全長 3~4cm の幼魚の群れが見られ、その数は多い。



写真提供: 稲葉 修氏

クロダイ (タイ科)

全長は 60cm ほど。国内では北海道南部よりも南の地域に広く分布している。幼魚は河川河口の汽水域だけでなく、時には中流域にまで姿をあらわす。

久慈川では、河口や下流域に多く見られ、その数も多い。河口では、クロダイ狙いの釣り人も見られる。



写真提供: 稲葉 修氏

シモフリシマハゼ (ハゼ科)

全長 10cm ほど。日本各地に分布する。河口などの汽水域に生息している。春から夏にかけて、石や障害物の下などで産卵する。

久慈川では河口に生息しており、比較的多く見られる。河口でのハゼ釣りでも釣れることがある。



写真提供: 稲葉 修氏

マハゼ (ハゼ科)

全長は大きい個体で 25cm くらいにまで成長する。日本各地に分布しており、特に下流域から河口にかけて多く見られるが、夏季に中流域までやってくる個体も見られる。

久慈川では河口や下流域に数多く生息しており、単に「ハゼ」と呼ばれて釣り人に親しまれている。



写真提供: 稲葉 修氏

クサフグ (フグ科)

全長は 15cm ほど。北海道の南部から南側の各地の沿岸に普通に生息している。集団産卵を行うことで知られている。

久慈川では、下流域から河口部に生息することが知られているが、特に夏季に河口にて幼魚の姿が見られる。

国内外来種と国外外来種

さまざまな魚類が生息する久慈川水系であるが、近年では釣人のために漁業組合や各種団体によって放流された魚種が多い。また、それらに混じって放流された、中部地方以西が原産である国内外来種が増加している。これに加え、国外から釣りの対象として、あるいは養殖業の振興のために持ち込まれた国外外来種もみられる。前者としてはオイカワ、カワムツ、ヌマムツ、ピウヒガイ、スゴモロコ、ゲンゴロウブナなどが、後者としてはニジマスやソウギョ、ハクレン、タイリクバラタナゴ、オオクチバス（ブラックバス）、ブルーギルなどがあげられる。いずれの種も、地史的な長い歴史を歩みながら形成されてきた久慈川独自の環境と魚類の生態系の中に、人的な要因によって放り込まれた種であり、在来種との関係が心配される。特に中流域の流れで個体数を増やし続けるオイカワやカワムツ、在来のタナゴ類と置き換わるように分布しているタイリクバラタナゴ、流域の溜池等で増加し魚食性の強いオオクチバス、他種魚類の卵まで捕食するブルーギルなどは、今後も久慈川水系の魚類達に大きな影響を与えるものと考えられる。これら国内外来種と国外外来種の動向には注意が必要である。



写真提供: 稲葉 修氏

カワムツ (コイ科)

全長 15cm。能登半島、静岡県以西の本州、四国、九州で見られたが、近年では関東地方の河川でも見られる。

河川の上・中流を中心に普通に見られ、特に流れの緩やかな淵に多く生息している。



写真提供: 稲葉 修氏

タイリクバラタナゴ (コイ科)

全長 6~8 cm。アジア東部と台湾が原産で 1940 年代に長江からハクレンの移入に伴い日本に渡来し、ほぼ日本全土に分散して。平野部の浅い池沼や河川敷内の池、あるいは河川や灌漑用のよどんだ場所に生息する



写真提供: 稲葉 修氏

オオクチバス (バス科)

全長 30~50cm。北米原産で 1925 年に芦ノ湖に移入され、その後各地に移植され、ほとんど日本全国に分布。

止水域を好み、湖沼をすみかとし、河川では下流域の流れのゆるやかなところに生息する。



写真提供: 稲葉 修氏

ブルーギル (バス科)

全長 25cm。北米原産で 1960 年に日本に移入され、日本全国の湖やため池に分布。

湖では沿岸帯の水草帯に、河川では流れのゆるやかな水草帯などに生息している

養殖メダカや養殖タナゴなどの放流の是非

現在、県内各地では「環境教育」や「川をきれいにする活動」等の計画の一つとして川や池に他地域原産や養殖したメダカやタナゴなどを放流する活動が盛んに行われている。これらの活動は久慈川水系の各地でも行われており、他地域から持ち込んで増殖させたメダカやタナゴ類を放流する個人や団体がみられる。しかし、これらの行為は逆に魚達にとってマイナスとなることが多い。魚に限らず様々な生物は、現在生息している場所（地域）において、その環境の形成とともに長い時間（歴史）をかけて適応してきた。そのことにより「同じ種でも、その場所ごとの色彩や模様、遺伝子が形成されていった」のである。このことから、生物が少なくなったからといって他地域の個体を安易に放流するのではなく、「現在残る環境をできる限り保全し、その地域ごとの生物のありのままの顔（色彩や遺伝子）を大切にする」努力が必要とされている。

分布上重要な魚類（希少種と減少種について）

久慈川水系では、前述したように分布上貴重な種や県内において減少している種がみられる。ここでは、これらの種について概説するが、大宮町の辰ノ口堰から河口までの区間（久慈川本流）においては、阿武隈淡水動物研究会や国土交通省の調査（平成13年度河川水辺の国勢調査）によって、スナヤツメ、ギバチ、オオヨシノボリなど環境庁（1999）や茨城県（2000）によって希少種以上にランク付けされた魚種が確認された。

表 6-6 保全上重要な魚類

科名	種名	選定根拠
ヤツメウナギ科	スナヤツメ	「環境庁レッドリスト」絶滅危惧類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」希少種
	カワヤツメ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」危急種
サケ科	イワナ（在来個体群）	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」絶滅危惧種
コイ科	ヤリタナゴ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」危急種
	タナゴ	「環境庁レッドリスト」準絶滅危惧 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」危急種
ドジョウ科	ホトケドジョウ	「環境庁レッドリスト」絶滅危惧IB類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」希少種
ギギ科	ギバチ	「環境庁レッドリスト」絶滅危惧類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」危急種
メダカ科	メダカ	「環境庁レッドリスト」絶滅危惧類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」希少種
トゲウオ科	降海型イトヨ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」危急種
ハゼ科	オオヨシノボリ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」希少種
	ジュズカケハゼ	「環境庁レッドリスト」地域個体群（関東地方）
	シロウオ	「環境庁レッドリスト」準絶滅危惧 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」希少種
	ポウズハゼ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」希少種
カジカ科	回遊型カジカ	「環境庁レッドリスト」絶滅危惧類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉（茨城県版レッドデータブック）」希少種



ヤツメウナギ科 写真提供: 稲葉 修氏
スナヤツメ

環境省 RL

絶滅危惧 類

茨城県 RDB

希少種

全長は20cmほど。北海道から本州、四国と九州に分布する。湧水のある細流や河川上流域下部から中流域に多く生息している。幼生期の個体(アンモシーテス)は泥の中に潜っている。久慈川水系では「ヤツメ」や「ヤツメウナギ」と呼ばれ、本流だけでなく支流の多くに生息していたが、湧水地の消滅や川底環境の変化などによって近年では著しく減少している。



ヤツメウナギ科 写真提供: 渡辺重行氏
カワヤツメ

環境省 RL

茨城県 RDB

危急種

全長 50cm ほど。太平洋側では茨城県以北、日本海側では島根県以北の本州と北海道に分布する。産卵は春に中流域で行われる。

久慈川では、かつて中流域から下流域で採集されており、スナヤツメ同様「ヤツメウナギ」などと呼ばれていたが、近年では減少している。



サケ科 写真提供: 稲葉 修氏
イワナ(在来個体群)

環境省 RL

茨城県 RDB

絶滅危惧種

全長 30cm 前後に成長する。久慈川水系では一部の支流にのみ生息しているが、このうち常陸太田市北部の個体群は天然記念物に指定されている。一部は禁漁区になっているが、生息域が短くいずれも小さな個体群である。どの個体も背部に明瞭な虫食い模様があり、これは遺伝的に固定されていると考えられる。河川周辺の森林伐採の影響や密漁等により激減している。



コイ科 写真提供: 稲葉 修氏
ヤリタナゴ

環境省 RL

茨城県 RDB

危急種

全長 10cm 前後に成長する。本州、四国、九州(南部を除く)に分布する。河川中流域から下流域の淵や淀みにも生息するが、流域の水路や溜池などに多い。産卵期は春から夏。

久慈川水系では中流域や下流域に注ぐ支流や水路、溜池に生息していたが、近年では水田地帯の圃場整備に伴う水路の直線化や三面護岸工事、タイリクバラタナゴの移殖やマニアの乱獲によって産卵母貝であるマツカサガイやヨコハマシジラガイ、ドブガイ類とともに減少した。さらにマニアによって他水系産の養殖個体が放流されたことにより、野生個体は消滅しつつある。



コイ科 写真提供: 稲葉 修氏
タナゴ

環境省 RL

茨城県 RDB

準絶滅危惧

危急種

全長 10cm ほど。神奈川県から青森県にかけての太平洋側の河川や湖沼に分布する。産卵は春から初夏に行われる。

久慈川水系では本流よりも支流に多く、場所によっては個体数が多い。しかし、環境の変化だけでなく産卵母貝であるカワシンジュガイやドブガイ類など、その生息地における二枚貝の減少と共に個体数が激減、あるいは消滅した生息地も見られる。



ドジョウ科
ホトケドジョウ

写真提供: 稲葉 修氏

環境省 RL

絶滅危惧 IB 類

茨城県 RDB

希少種

全長は6cmほど。青森県や中国地方の一部を除く本州と四国の一部に分布している。湧水を水源とする細流や湿地に生息し、春から初夏にかけて水草のある場所で産卵する。

久慈川水系では、特に流域の湧水のある小川や湿地などに多いが、標高500m以上の山間の湿地に生息する個体群も見られる。しかしながら、本種は茨城県全域において減少傾向にあり、生息環境の保全を含めた保護対策が必要となっている。



ギギ科
ギバチ

写真提供: 稲葉 修氏

環境省 RL

絶滅危惧 類

茨城県 RDB

危急種

全長は20cm前後の個体が多いが、時には25cmに達する個体も見られる。東北地方と関東地方に分布するが、東北地方では本種の分布のない地域もある。河川中流域に多く、初夏に石の下に卵を産む。

久慈川水系では、かつては本流だけでなく多くの支流に生息していた。環境が変化したことにより、現在では「ギンギョ」や「ギギ」などの地方名が残るのみで姿を消した場所が多い。



メダカ科
メダカ

写真提供:
(株)建設環境研究所

環境省 RL

絶滅危惧 類

茨城県 RDB

希少種

全長4cm前後になる。本州から四国、九州、そして琉球列島に分布する。主に小川など細流の流れの緩い場所や、池、湖沼などに生息している。産卵期は地域や場所によって異なるが、春から夏の期間である。

久慈川水系では、主に久慈川本流の中流域から下流域沿いの水田周辺の水路や池などに見られる。しかし近年では、環境の変化によって減少しているだけでなく、他地域からの移殖個体によって久慈川水系独自の遺伝的特性が失われている地域があると思われる。



写真提供: 稲葉 修氏

トゲウオ科
降海型イトヨ

環境省 RL

茨城県 RDB

危急種

全長は8cm前後。北海道、本州、北九州の一部に分布する。早春に海から河川へと遡上し、春から初夏にかけて河川中流域から下流域、あるいはその流域の水路や湧水地で産卵する。孵化して全長3cmほどに成長した稚魚は海に降りて成長し、翌年河川へと遡上する。

久慈川では、中流域下部～下流域にて成魚や降下する稚魚を確認している。

環境百科 久慈川



写真提供: 稲葉 修氏

ハゼ科
オオヨシノボリ

環境省 RL

茨城県 RDB

希少種

全長11cmほど。北海道を除く日本各地に分布するが、本種のあまりみられない地域もある。河川上流域下部から中流域にかけての瀬に生息している。初夏に産卵し、孵化した仔魚は海に降下して全長2cmほどに成長すると河川に遡上する。

久慈川本流では常陸大宮市以北の瀬に多く、支流の山田川や里川にも生息している。しかし、近年では川底環境の変化で減少している。



写真提供: 稲葉 修氏

ハゼ科
ジュズカケハゼ

環境省 RL

地域個体群(関東地方)

茨城県 RDB

全長5cm前後の小さなハゼ。北海道から九州に分布するとされている。河川中流域から下流域、そして流域の溜池や湖沼に生息するが、近年、関東地方の河川中流域に見られるものは、他の水域のものとは遺伝的に異なっていることが報告されている。

久慈川水系では、中流や下流域の流域に見られる溜池や水路から確認されているが、環境の変化や外来種の影響によって年々減少している。



ハゼ科 写真提供: 稲葉 修氏
シロウオ

環境省 RL
茨城県 RDB
準絶滅危惧
希少種

全長 5cm 前後。北海道南部から九州にかけて分布する。普段は沿岸域に生息し、春に河川下流域に産卵のため遡上する。

久慈川では、主に 4~5 月に下流域にて姿を見ることができる。かつては数多く確認できたようであるが、近年では下流域や河口の環境や水質が変化したことによって減少してしまった。



ハゼ科 写真提供: 稲葉 修氏
ボウズハゼ

環境省 RL
茨城県 RDB
-
希少種

全長 12~13cm。主に茨城県以南の太平洋側から琉球列島に分布するが、近年では福島県からも確認されている。河川上流域下部から中流域の瀬に多く生息し、初夏に産卵する。

久慈川では、常陸大宮市以北で確認されており、夏季にアユの友釣りをする釣り人のオトリアユに吸い付いてくることもある。



カジカ科 写真提供: 稲葉 修氏
回遊型カジカ

環境省 RL
茨城県 RDB
絶滅危惧 類
(ウツセミカジカに含めて)
希少種

全長は 18cm ほどになる。北海道南部から本州、四国、九州に分布する。河川中流域から下流域の瀬に生息し、春に産卵する。

久慈川では、かつて大宮町よりも下流側の中流域から下流域に多かったとされるカジカが本種であったと思われる。現在では下流域の瀬に見られるが個体数は少ない。なお、久慈川支流に生息する陸封型カジカも環境の変化によって減少が著しく、各沢の個体群ごとの保護の必要がある。

3) 久慈川の鳥類

久慈川は水環境に依存する鳥から山の鳥まで一括して楽しむことができる、非常にコンパクトな川といえる。河口部の湾内の水域では、春季及び冬季にはカモメ類を中心に水域を利用する種が多い。また下流より辰ノ口までの草地や農耕地では、冬季には陸域を生息の場に行っているホオジロ、カシラダカ、スズメなどが多く生息している。また、辰ノ口堰付近の森林地帯では、夏季にサシバ、冬季にノスリが生息している。支川の山田川のワンドでは、冬季にはオオハクチョウの飛来も確認されており、本川の粟原地区は、オオハクチョウやコハクチョウの重要な自然の餌の採食地となっている。鳥類の生息地としてみると、久慈川の河川敷は休息の場を提供している。

また、低水路にはコアジサシ、チドリ類の繁殖地が、中流部の高水敷の樹林にはサギ類の集団営巣地であるコロニーが存在する。なかでもイカルチドリは、支流の里川から久慈川本流沿いに生息・繁殖地が集中しており、久慈川流域が県内有数の繁殖地となっている。サギ類の大規模なコロニーがある里川合流地点下流では、砂礫地でイカルチドリが繁殖し、かつてはコアジサシも繁殖しており、鳥類の繁殖地として重要な拠点である。

鳥類と河川の関わり

久慈川で見られる鳥は、年間を通して河川に依存している鳥から時々訪れる程度の鳥まで、種類により河川とのかかわり方は多様である。これら鳥類は、大きく以下の4つのグループに分けることができる。

表 6-7 鳥類と久慈川の関わり

区分	代表的な鳥類
<p>主に河川内の水辺で生活する鳥 河川の水辺で主に採食し、ほぼ河川内のみで生活を完結している鳥である。河原で繁殖する鳥と冬に訪れ河原で採食する鳥がこれに当たる。河川を主な生活の舞台としているので、河川の鳥と呼ぶにふさわしい。</p>	コアジサシ、カワセミ、ヤマセミ、セグロセキレイ、イソシギ、カワガラスなど
<p>河川内だけでなく河川外でも生活する鳥 河川内と河川外のどちらにも生活している鳥である。河川内にも生活できる環境があるので見られるというだけで、河川環境に特に依存しているわけではない。</p>	ヒバリ、キジ、モズ、ホオジロ、キジバト、ハクセキレイ、サギ類など
<p>採食や休息、ねぐらをとるために河川を訪れる鳥 このグループの鳥は、生活の本拠地は河川外にある。1年のある時期に限って採食や休息、ねぐらをとるためだけに河川を訪れる。ノスリ、トビなどの猛禽類などもこのタイプで、河川に隣接した山地で繁殖し、採食のために河川を訪れる。</p>	ムクドリ、スズメ、カワラヒワなど
<p>渡りの時期、一時的に立ち寄る鳥 春と秋の渡りや移動の途中、一時的に河川を利用する鳥である。</p>	ノビタキ、ショウドウツバメ、アマツバメ、ノゴマなど

河原で繁殖する鳥の営巣場所

コチドリ、イカルチドリ、コアジサシは、増水によってできた草の生えていない砂礫地に巣をつくる。特に、体が大きく警戒心の強いコアジサシは、より安全な中州などの砂礫地にしか営巣しない。砂礫地に草が生えてくると、イソシギやヒバリが草の根元に巣をつくり、繁殖を始める。また、流木の下などに、セグロセキレイが巣をつくる。

さらに遷移が進み、草が密に生え、背の低い一面の草原になると、イソシギとヒバリは繁殖できなくなり、代わってセッカ、ホオジロが巣をつくり繁殖を始める。ヨシやオギといった背の高い草原になると、オオヨシキリ、ヨシゴイが巣をつくる。

草原の中にノイバラ、ヤナギ類等の藪や低木が入り込むと、モズがそれらの中に巣をつくる。木が高くなるにつれ、キジバト、オナガが巣をかける。木が大きくなり、林を形成すると、ササゴイ、ハシボソガラスが巣をつくる。さらに、木が大きくなると、ハシブトガラス、トビが営巣を始める。

以上のように、河川で繁殖する鳥は、種類ごとにそれぞれ異なった環境で繁殖している。そのため、河川環境の移り変わりとともに繁殖する鳥の種類も入れ替わってゆくことになる。

河川環境の最大の特徴は、時折見舞われる増水によって、途中まで進んだ遷移が最初の段階に戻される点である。大きな増水がなく環境が安定していると、砂礫地に草が生え、コチドリ、イカルチドリ、コアジサシが繁殖できなくなる。河川を数 km といったスケールで見ると、ある場所で砂礫地に草が生え、コチドリ、イカルチドリ、コアジサシが繁殖できなくなっても、次の増水によって別の場所で新たに裸地の砂礫地が形成されるので、これらの鳥は、新たな営巣環境を求めて移動することで繁殖を継続することができる。

河川に生息する鳥は、巣をつくる場所だけでなく、食べる餌の種類、大きさ、餌の捕らえ方、餌を捕る場所も種類ごとに少しずつ異なる。さらに、種類により日中の休息場所、隠れ場所、夜間のねぐら場所も異なる。これらの違いは、長い進化の過程で、お互いの競争を少なくするようにできあがってきたと考えられる。

崖に穴を掘って繁殖する鳥

川の流れて削られた崖に穴を掘って繁殖する鳥がいる。水辺の枝や杭などに止まり、水に飛び込み魚を捕らえるヤマセミとカワセミである。どちらも長く大きなくちばしを持ち、魚が主食である。両者は、体の大きさが異なり、ヤマセミはハトぐらいなのに対し、カワセミはスズメほどの大きさしかない。そのため、捕らえる魚の大きさは、体の大きさに応じて異なっている。ヤマセミは、本来は河川の上流域にすむ鳥であるが、久慈川では最近中流域でも普通に見られるようになった。それに対し、カワセミは上流域には見られなく、中流域と下流域に生息する。

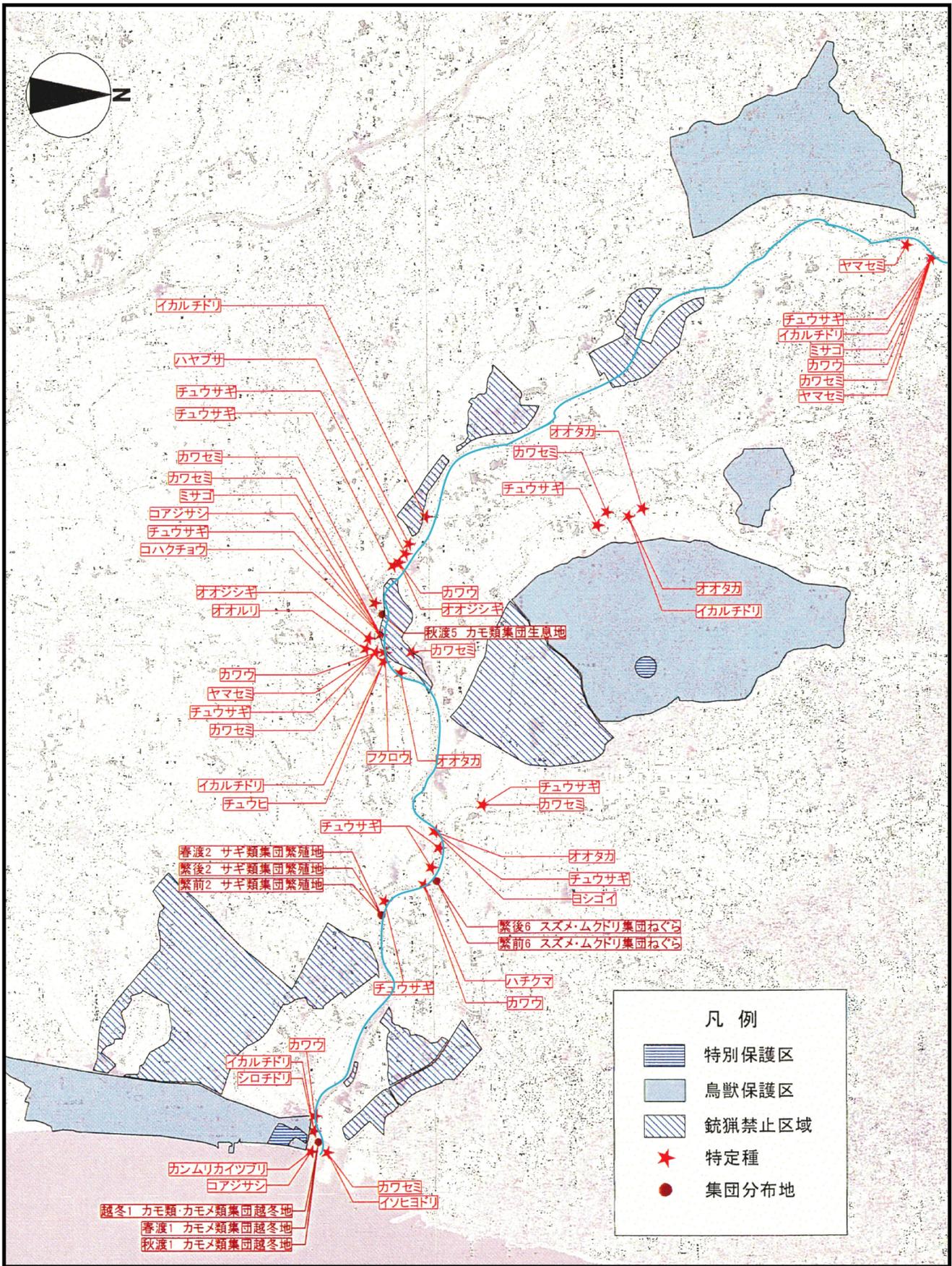


図 6-5 保全上重要な鳥類の確認地点・集団分布地確認地点

(「平成13年度 久慈川河川水辺の国勢調査(鳥類)」より)

中州や砂礫州で集団繁殖するコアジサシ

コアジサシの巣づくりに適した場所は、中州や砂礫州の一部に限られ、その場所に多くのつがいが集まって巣をつくる。粟原床固周辺や里川合流地区などでは、過去に集団繁殖が確認されている。

コロニーにカラスやサギなどが接近すると、集団で雛や卵を防衛する。また、洪水によって流されてしまうこともあり、河川内で繁殖する鳥類は常に危険にさらされている。さらに、最近ではRV車（多目的レジャー車）が河川内を走り回り、雛や卵がつぶされるなどの被害が懸念される。

集団で繁殖するサギ類

久慈川ではサギ科の鳥は、コサギ、チュウサギ、ダイサギ、アマサギ、アオサギ、ゴイサギ、ササゴイ、ヨシゴイの8種が生息する。サギ科の鳥は、長い首、長いくちばし、長い足といった共通の特徴を持つ。水辺にすむことが多く、主に魚、カエル、甲殻類などの水生の動物を餌としている。

里川合流地区には、久慈川流域最大のサギ類（ゴイサギ、アマサギ等）のコロニーが形成されている。

水辺で餌をついばむ鳥

河川の水辺では、水生昆虫が羽化し植物から水に落ちた昆虫が流れつくなどして、昆虫を食性とする鳥類にとっての採餌場として機能する。久慈川では、チドリ科のコチドリ、イカルチドリ、シギ科のイソシギ、セキレイ科のセグロセキレイ、ハクセキレイ、キセキレイである。これらの鳥は、水辺に沿って歩き回り、虫をついばんで食べる。

保全上重要な鳥類

直轄管理区間を対象として実施される平成 12、13 年度河川水辺の国勢調査（鳥類調査）で確認された保全上重要な鳥類は、以下に示すとおりである。

表 6-9 河川水辺の国勢調査（鳥類調査）で確認された保全上重要な鳥類

科名	種名	選定根拠
カイツブリ科	カンムリカイツブリ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
サギ科	ヨシゴイ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
	ササゴイ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」危急種
	チュウサギ	「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 〈鳥類〉」準絶滅危惧種
カモ科	シノリガモ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
タカ科	ミサゴ	「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 〈鳥類〉」準絶滅危惧種 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」危急種
	オオタカ	「絶滅のおそれのある野生動植物の保存に関する法律」指定種 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 〈鳥類〉」絶滅危惧類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」危急種
	ハイタカ	「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 〈鳥類〉」準絶滅危惧種 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
	チュウヒ	「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 〈鳥類〉」絶滅危惧類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」危急種
ハヤブサ科	ハヤブサ	「絶滅のおそれのある野生動植物の保存に関する法律」指定種 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 〈鳥類〉」絶滅危惧類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」危急種
チドリ科	イカルチドリ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
	シロチドリ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
シギ科	オオジシギ	「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 〈鳥類〉」準絶滅危惧種 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
カモメ科	コアジサシ	「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 〈鳥類〉」絶滅危惧類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
カッコウ科	カッコウ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
カワセミ科	ヤマセミ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
ツバメ科	コシアカツバメ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
ツグミ科	イソヒヨドリ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種
ヒタキ科	オオルリ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」希少種

- 注) ・「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 」は平成 14 年 8 月に公表された鳥類編を使用。
・茨城県版レッドデータブックは平成 12 年 3 月に刊行された動物編を使用。



カイツブリ科
カンムリカイツブリ
写真提供:
(株)建設環境研究所

環境省 RDB

茨城県 RDB

希少種

冬鳥として飛来し、まれに大きな湖沼で越冬する。越冬期には内湾の海上にも現れる。巣は水草を材料に浮き巣として、あるいは浅瀬に作られ、普通4卵が産みこまれる。



サギ科
ヨシゴイ
写真提供:
(株)建設環境研究所

環境省 RDB

茨城県 RDB

希少種

池や沼、川岸、休耕田などで、ヨシ、マコモ、ガマ類など背の高い単子葉植物が茂った湿地にすむ。多くはヨシ原の中など、水生植物の生えている水辺に好んで営巣するが、池の中の島などに、数つがいが集まって営巣することもある。



サギ科
ササゴイ
写真提供:
(株)建設環境研究所

環境省 RDB

茨城県 RDB

危急種

主に低地や平地の河川の水辺に生息するが、池沼、水田、時には海岸にも出現することがある。水辺近くのヤナギ林、マツ林、竹林、市街地の大木などの樹上に、1~10数つがい単独または集団で営巣する。



サギ科
チュウサギ
写真提供:
(株)建設環境研究所

環境省 RDB

茨城県 RDB

準絶滅危惧種

水田や湿地で生活し、川の流れの中や干潟に出ることは少ない。他のサギ類とともに、平地のヤナギ林や竹林などに集団で繁殖コロニーをつくる。



カモ科
シノリガモ
写真提供:国土環境(株)

環境省 RDB

茨城県 RDB

希少種

繁殖期には内陸の溪流にすむが、冬期はおもに本州中部以北の岩の多い海岸の海上にみられる。日本で繁殖が確認されているのは、いずれも標高600m~800mの山地の溪流である。巣は溪流近くの木の葉に覆われた地上や岩の隙間の地上に作られる。



タカ科
ミサゴ
写真提供:
(株)建設環境研究所

環境省 RDB

茨城県 RDB

準絶滅危惧種

危急種

海岸、大きな川、湖などに生息する。人気のない海岸の岩の上や岩棚、水辺に近い大きな木の上に枯れ枝を積んで皿型の巣をつくる。



タカ科
オオタカ

写真提供:
(株)建設環境研究所

種の保存法 掲載種
環境省 RDB

茨城県 RDB
絶滅危惧 類
危急種

亜高山から平地の林に生息するが、しばしば獲物を求めて農耕地や水辺の開けた場所へも出てくる。

林内の大木の枝上に枯れ枝を積んで皿型の巣をつくる。



タカ科
ハイタカ

写真提供:国土環境(株)

環境省 RDB

茨城県 RDB

準絶滅危惧種
希少種

低山帯の林にすみ、秋冬には平地の農耕地や市街地の上空にもみられる。

高木の枝上に営巣し、巣は毎年つくることが多い。枯枝を主材として皿型の巣をつくる。



タカ科
チュウヒ

写真提供:上原 励氏

環境省 RDB

茨城県 RDB

絶滅危惧 類
危急種

草地、ヨシ原、農耕地、牧草地などを生活圏とし、背丈の高い草やヨシの中、時には林の中に身を隠して休息していることが多い。

広いヨシ原などの地上に小枝やヨシの茎を積んで皿型の巣をつくる。



タカ科
ハヤブサ

写真提供:
(株)建設環境研究所

種の保存法 掲載種
環境省 RDB

茨城県 RDB
絶滅危惧 類
危急種

広い空間で狩りをするため、海岸や海岸に近い山の断崖や急斜面、広い川原、原野、広い農耕地などを生活域とする。

海岸や海岸に近い山地の断崖の岩棚に営巣する。



チドリ科
イカルチドリ

写真提供:
(株)建設環境研究所

環境省 RDB

茨城県 RDB

希少種

川の中流より上の砂礫の川原や中州に生息し、冬期には水田などにも現れる。

主として砂利の多い川原で繁殖し、特に中流域の氾濫原の礫の多いところを好む。砂や土の多い埋立地では繁殖しない。



チドリ科
シロチドリ

写真提供:
(株)建設環境研究所

環境省 RDB

茨城県 RDB

希少種

川の下流や海岸に生息する。繁殖期には、ややコロニー状に集まって営巣し、営巣環境によってその場所に適した巣作りをする。主に開けた砂地や砂礫地の地面に作られる。



写真提供:
(株)建設環境研究所

シギ科
オオジシギ

環境省 RDB

準絶滅危惧種

茨城県 RDB

希少種

北海道では草原、牧場、湿原などで普通に見られるが、本州では高原に局地的に生息するのみ。繁殖地の南限は富士山麓。

巣は地上に作られる。



写真提供:
(株)建設環境研究所

カモメ科
コアジサシ

環境省 RDB

絶滅危惧 類

茨城県 RDB

希少種

繁殖期には広い川や海岸に生息し、コロニーを作って営巣する。巣は砂礫地の地面を浅く掘り凹めた簡単なもの。



写真提供:(財)埼玉県
生態系保護協会

カッコウ科
カッコウ

環境省 RDB

-

茨城県 RDB

希少種

平地から山地のヨシ原、木のまばらにある草原、農耕地、カラマツ林、明るい林などに夏鳥として渡来し、枯枝、梢、電線などにとまって鳴く。

自分では巣をつくらず、他の鳥の巣に卵を1個ずつ産みこむ。育て親としては数十種の鳥が記録されている。



写真提供:
(株)建設環境研究所

カワセミ科
ヤマセミ

環境省 RDB

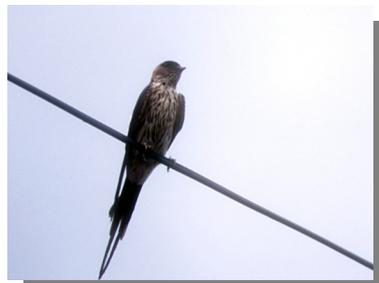
-

茨城県 RDB

希少種

山地の溪流や湖沼に生息し、単独またはつがいで見られる。

繁殖期には、川や湖の岸辺やその近くの土の崖に、くちばしを使って巣穴を掘る。



写真提供:パンフィック
コンサルタンツ(株)

ツバメ科
コシアカツバメ

環境省 RDB

-

茨城県 RDB

希少種

人工建造物に営巣するが、木造の建物よりもモルタルやコンクリート造りの大きな建物を好む傾向がある。

巣作りの土台にツバメの巣を使うことがあるが、一方ではしばしばスズメに巣を奪われる。



写真提供:多田恒雄氏

ツグミ科
イソヒヨドリ

環境省 RDB

-

茨城県 RDB

希少種

本来の生活場所は崖や岩場のある海岸であるが、海沿いの人口構造物の多い場所にも生息する。

繁殖は、岩の隙間などに枯草や細根で椀型の巣を作って行われる。



ヒタキ科
オオルリ

写真提供：
(株)建設環境研究所

環境省 RDB

茨城県 RDB

希少種

主に谷沿いのよく茂った林に
生息する。

切り立った崖や石垣が途中で
段になった所などに、蘚類を主
な材料にして椀型の巣を作る。

4) 久慈川の底生動物と昆虫

直轄管理区間を対象として実施された平成12年度の河川水辺の国勢調査で確認された底生動物は201種である。

構成種を見ると、チラカゲロウ・エルモンヒラタカゲロウ・カミムラカワゲラ・ウルマーシマトビケラ等といった清流を指標する種が数多く確認されている。久慈川は、河床・水際等の構造や水質が良好な状態に保たれている河川であることがうかがえる。

表 6-10 きれいな水に生息する底生動物の出現状況

平成12年度 久慈川河川水辺の国勢調査															
No.	綱名	目名	科名	種名	河川名 河口からの距離(km) 地区名	久慈川					鳳川		山田川		
						1.9-2.7	5.6-6.1	13.5-15.0	18.2-18.8	25.0-25.5	29.0-29.4	0.5-0.8	8.1-8.5	2.1-2.5	8.9-9.3
						久慈大橋	樽橋下流	栗原床岡	栄橋	富岡橋下流	辰ノ口	八幡橋	根本橋	永代橋下流	岩手橋下流
1	ウズムシ綱	ウズムシ目	Dugesiiidae	ナミウズムシ											
2	マキガイ綱	ニナ目	カワニナ科	カワニナ											
3	甲殻綱	エビ目	テナガエビ科	スジエビ											
4		カゲロウ目	ヒラタカゲロウ科	シロタニガワカゲロウ											
5				エルモンヒラタカゲロウ											
6				ウエノヒラタカゲロウ											
7				モンカゲロウ科	モンカゲロウ										
8				カワカゲロウ科	キイロカワカゲロウ										
9				マダラカゲロウ科	シリナガマダラカゲロウ										
10		トンボ目	サナエトンボ科	ダビドサナエ											
11				アオサナエ											
12				オジロサナエ											
13		カワゲラ目	カワゲラ科	カミムラカワゲラ											
14		アミメカゲロウ目	ヘビトンボ科	クロスジヘビトンボ											
15				ヘビトンボ											
16		トビケラ目	シマトビケラ科	ウルマーシマトビケラ											
17			ヒゲナガカワトビケラ科	ヒゲナガカワトビケラ											
18			ニンギョウトビケラ科	ニンギョウトビケラ											
19		ハエ目	アミカ科	クロバアミカ											
20		コウチュウ目	ヒラタドROMシ科	マスダチビヒラタドROMシ											

注1) 「生物による水質調査法」に示される非耐汚濁性の種類を抽出
 注2) 平成12年度河川水辺の国勢調査結果をもとに作成

また、樹林に覆われた湧水起源の細流に生息するコシボソヤンマやミルンヤンマ、溪流環境に見られるサナエトンボ科のホンサナエ、コオニヤンマ、ダビドサナエ、オナガサナエ、ミヤマサナエ、オジロサナエ等が確認されていることから、支流や本川の上流部が、これらの種の生息を支え得る良好な環境であることがわかる。

久慈川はトンボ類が多様であり、流れに生えている水生植物中に棲むカワトンボ類やコシボソヤンマ・コヤマトンボ、瀬に棲むオナガサナエ、流れの中の小砂が堆積したところに棲むアオサナエ・ヒメサナエ・キイロヤマトンボなどが確認されている。しかし、ヨシ原等の水生植物帯に普通に見られるイトトンボ類は3種類のみと少なく常陸大宮市(旧大宮町)から下流域ではトンボ類は低地性の種類が主流となり、オニヤンマ、ギンヤンマ、アカネ類のアキ・ナツ・マユタテアカネが多くみられるが、山地性のトンボ類は少なくなる。

また、トンボ類以外では、河口に見られるアシハラガニ・オオヒライソガニといった汽水性の甲殻類もほとんど確認されていない。カニ類などの甲殻類は、干潟やヨシ原を餌場とするシギ・チドリ類等の重要な餌資源でもあることから、これらの種が少ないことは、河口域生態系の貧弱さを意味する

ものと推察される。底生動物の生息状況からみれば、上流部における生物の生息環境は多様かつ良好であり、一方汽水域はまとまった干潟やヨシ原などが少なく貧弱である。

久慈川の河川環境を昆虫類のハビタットの視点から分類し、環境区分ごとに代表的な昆虫類を整理すれば以下のように整理される。

表 6-11 環境区分とそこで見られる代表的な昆虫類

環境区分	代表的な昆虫
流水域水際	ハグロトンボ、ミヤマカワトンボ、アオハダトンボ、サナエトンボ類、ミズギワゴミムシ類、コオナガミズスマシ等
止水域・ワンド	イトトンボ類、ショウジョウトンボ、オオシオカラトンボ、コシアキトンボ、ノシメトンボ、アメンボ類、タガメ、ゲンゴロウ類、ガムシ等
砂礫地	ヒゲジロハサミムシ、カワラゴミムシ、ゴミムシ類、ハンミョウ類、スナゴミムシダマシ類等
高茎草地(ヨシ・オギ・ススキ等)	コバネナガカメムシ、ギンイチモンジセセリ、ヒゲナガヤチバエ、ヨツボシモンシデムシ、アカガネコハナバチ等
低茎草地(イネ科草本等)	ウスイロササキリ、キリギリス、マツムシ、エゾイナゴ、コバネヒョウタンナガカメムシ、モンシロチョウ、キチョウ、フタモンアシナガバチ、キクスイカミキリ等
竹林	オオチャバネセセリ、コチャバネセセリ、クロヒカゲ、ヒカゲチョウ等
ヤナギ林	セミ類、コムラサキ、ヤナギルリハムシ、ヤナギカワウンカ、コクワガタ、ヤナギシリジロソウムシ等
コナラ・クスギ・エノキ林	セミ類、クサギカメムシ、チャバネアオカメムシ、ミスイロオナガシジミ、ゴマダラチョウ、サトキマダラヒカゲ、カブトムシ、ヤマトタマムシ等

久慈川で確認されるトンボ類

トンボ類は、生活史の段階において幼虫時代に水域を必要とするため、河川環境とは関わりが特に深い昆虫類である。このトンボ類については、環境（場）との関係が体系的に整理されており、『原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑』（1999, P 482-494）によれば、表 6-12 に示すとおり環境によって区分されている。

トンボ類は、種により一定の水域に限って生息する傾向が強く、止水域に生息する種類と流水域に生息する種類の 2 タイプに大別される。

平成 8 年度河川水辺の国勢調査（陸上昆虫類調査）をもとに、確認されるトンボ類と生息環境との関係は表 6-12 のとおり整理される。

この整理結果からは、久慈川沿川においては様々な環境が維持されていると考えられるが、流水域に生息する種類のうち抽水植物や水中植物が繁茂する流水にほぼ限って生息するトンボ類は 4 種（ミヤマカワトンボ、アオハダトンボ、ハグロトンボ、ヒガシカワトンボ）と少ないこと、及び河川の下流域に依存する種類にいたってはその種類は皆無であり、このことは水際部における高茎草本類が生育する場所や汽水域における環境が大きく改変を受けていることが示唆される（表 6-12 の太線枠内を参照）。

表 6-12 トンボ類の環境区分とそこに生息する種類

環境区分		該当するトンボ類	
挺水植物や水中(沈水)植物が生育する池沼にほぼ限って生息する種類	特に食性を限定しない	ホソミオツネトンボ、オツネトンボ、モノサシトンボ、キイトトンボ、アオモンイトトンボ、アジアイトトンボ、クロイトトンボ、オオイトトンボ、ムスジイトトンボ、ルリボシヤンマ、ギンヤンマ、クロスジギンヤンマ、コサナエ、ウチワヤンマ、シオカラトンボ、ショウジョウトンボ、コシアキトンボ、ウスバキトンボ	
	ヨシ・ガマ・マコモなどの背丈の高い挺水植物が密生する池沼にほぼ限って生息する種類	チョウトンボ	
	クログワイ・ヒメホタルイなど組織の柔らかい挺水植物が生育する池沼にほぼ限って生息する種類	コバネアオイトトンボ	
	ジュンサイ・ヒルムシロ・ヒンなどの浮葉植物が繁茂する池沼にほぼ限って生息する種類	トラフトンボ	
	水際に植物が密生するエリアのある池沼に多く見られる種類	ナツアカネ、ノシメトンボ	
	枯れ葉や粗朶など植物性沈積物が豊富な腐植栄養型池沼に多く見られる種類	モノサシトンボ、コフキトンボ	
	池畔に樹木が生育する池沼にほぼ限って生息する種類	オオアオイトトンボ	
止水(静水)域に生息する種類	比較的開放的な大きい池沼や湖を好む種類	コオニヤンマ、ウチワヤンマ、オオヤマトンボ	
	比較的小さいやや鬱閉的な池沼を好む種類	クロスジギンヤンマ、オオシオカラトンボ、コシアキトンボ	
	一般的な溜池を好む種類	コサナエ、コヤマトンボ、シオカラトンボ、ウスバキトンボ	
	比較的広い開放水面のあるやや深い池を好む種類	オオヤマトンボ	
	水際に渚的エリアのある池沼にほぼ限って生息する種類	マユタテアカネ	
	人工的水域に生息する種類	寺社の境内池など比較的鬱閉的な水域を好む種類	モノサシトンボ、クロイトトンボ、クロスジギンヤンマ、オオシオカラトンボ、マイコアカネ、コシアキトンボ
		公園の池やプールなど明るい水域を好む種類	キイトトンボ、アオモンイトトンボ、アジアイトトンボ、シオカラトンボ、ウスバキトンボ
		野壺などの人工的小水域にも好んで生息する種類	クロスジギンヤンマ、オオシオカラトンボ
	その他の池沼にすむ種類	湿地や湿原(滞水)に生息する種類	コバネアオイトトンボ、オオアオイトトンボ、ホソミオツネトンボ、オツネトンボ、キイトトンボ、アオモンイトトンボ、アジアイトトンボ、クロイトトンボ、オオイトトンボ、ムスジイトトンボ、コサナエ、オニヤンマ、ハラビロトンボ、シオカラトンボ、シオヤトンボ、ショウジョウトンボ、ナツアカネ、マユタテアカネ、ノシメトンボ、ウスバキトンボ
		寒・高冷地の湿地や湿原	コサナエ、ルリボシヤンマ
	ハンノキやヤナギ類が疎生する湿地林に生息する種類	サラサヤンマ、オニヤンマ	
	ガレ場などの水がしたりおちるような特殊な湧水域に生息する種類	オニヤンマ	
	苗代・水田(休耕田を含む)及び周辺の溝川などに生息する種類	ホソミオツネトンボ、キイトトンボ、アオモンイトトンボ、アジアイトトンボ、クロイトトンボ、オオイトトンボ、ムスジイトトンボ、セスジイトトンボ、ギンヤンマ、ハラビロトンボ、シオカラトンボ、シオヤトンボ、オオシオカラトンボ、コフキトンボ、ショウジョウトンボ、ナツアカネ、アキアカネ、マユタテアカネ、ノシメトンボ、ウスバキトンボ	
	大河のデルタにほぼ限って生息する種類	オオモノサシトンボ	
	海岸の汽水沼や湿地、河口の感潮帯にほぼ限って生息する種類	該当なし	
海岸の汽水沼や湿地、河口の感潮帯でも採集される(された)種類	オツネトンボ、アオモンイトトンボ、アジアイトトンボ、ムスジイトトンボ、ギンヤンマ、シオカラトンボ、コフキトンボ、ショウジョウトンボ、マイコアカネ		
海岸断崖のタイプールに生息する種類	アジアイトトンボ、シオカラトンボ、ショウジョウトンボ、ウスバキトンボ		
流水域に生息する種類	挺水植物や水中植物が繁茂する流水にほぼ限って生息する種類	山間の溪流的環境にほぼ限って生息する種類 ミヤマカワトンボ	
	平坦地の緩流的環境にほぼ限って生息する種類	アオハダトンボ、ハグロトンボ、ヒガシカワトンボ	
	柔らかい組織を持つ流畔植物が生育する流水にほぼ限って生息する種類	該当なし	
	朽木など柔らかい枯死植物のある流水にほぼ限って生息する種類	該当なし	
	特に挺水植物や水中植物に関わりのない流水に生息する種類(特に挺水植物や水中植物を生活必須条件としない)	河川の上流(山間の溪流)に生息する種類	ヤマサナエ、ダビドサナエ、コオニヤンマ、オニヤンマ
		河川の中流に生息する種類	コオニヤンマ、コヤマトンボ、オニヤンマ
		河川の下流に生息する種類	該当なし
		小川などの緩流に生息する種類	コオニヤンマ、コヤマトンボ
		湿原の流水あるいは湧水に関わる流水に生息する種類	アオハダトンボ
		水田の畦間を流れる細流などに生息する種類	コサナエ、オニヤンマ
水郷域の溝川に生息する種類		キイトトンボ、アオモンイトトンボ、アジアイトトンボ、クロイトトンボ、コサナエ、コフキトンボ、ショウジョウトンボ、コシアキトンボ、チョウトンボ、ウスバキトンボ	

久慈川で確認されるチョウ類

久慈川など河川環境の特徴の一つは、障害物が少ない開けた環境が多い点であり、久慈川で見られるチョウ類のほとんどは、これらの開けた環境にすむチョウである。

昆虫の中でも特にチョウ類は、種類ごとに幼虫の時期に食べる植物(食草という)が特定の種類や同じグループの植物に限定される(表 6-13)。例えば、モンシロチョウやスジグロシロチョウはアブラナ科植物の各種、モンキチョウやツバメシジミ、ウラナミシジミはマメ科植物の各種、ベニシジミはタデ科植物の各種、キアゲハはセリ科植物の各種、チャバネセセリはイネ科植物の各種などと、同じグループの植物に限定される。

そのため、それぞれの種類のチョウは、幼虫の食草が生えている環境かその周辺でよく見られる。久慈川の土手や水辺付近には、モンキチョウの幼虫が好むシロツメクサ、ツマキチョウの幼虫が好むタネツケバナ、キアゲハの幼虫が好むセリ、ベニシジミの幼虫が好むスイバなどの食草が生えている。ヒメジャノメはススキやエノコログサなど、コムスジはニセアカシアやクズなどを幼虫の時期に食草としている。ヒメシロチョウについては、河原に生育するツルフジバカマを食草としており、太子町(下野宮、上小川)のごく限られた場所で確認されている。さらに、タケ亜科植物を食草としているチョウ類としてはクロヒカゲ、ヒカゲチョウ、コチャバネセセリ、オオチャバネセセリ、ヤナギ科植物を食草とするコムラサキ、ニレ科のエノキ類を食草としているチョウ類としてはゴマダラチョウ、テングチョウ、ニセアカシアを食草としているチョウ類としては、キチョウ、モンキチョウなども生息している。これら河川敷内に生えているタケ類や草本、樹木を食草としている種が久慈川を代表するチョウ類である。

表 6-13 チョウ類と食草の関係

	種名	幼虫が食べる植物(食草)
1	キアゲハ	セリ、ニンジン、バセリなど
2	ジャコウアゲハ	ウマノスズクサ
3	モンシロチョウ	キャベツ、ダイコン、ノザワナなど
4	モンキチョウ	アカツメクサ、シロツメクサなど
5	スジグロシロチョウ	タネツケバナ、イヌガラシなど
6	ツマキチョウ	タネツケバナ、イヌガラシなど
7	ヒメシロチョウ	ツルフジバカマ
8	キチョウ	ニセアカシア、メドハギなど
9	ツマグロキチョウ	カワラケツメイ
10	ベニシジミ	スイバ、ギシギシ、ヒメスイバなど
11	ツバメシジミ	シロツメクサ、ハギ類など
12	ヤマトシジミ	カタバミ類
13	ウラナミシジミ	アズキ、ダイズ、ササゲ類など
14	テングチョウ	エノキ類
15	コムスジ	ニセアカシア、クズ、メドハギなど
16	キタテハ	カナムグラ、アサ
17	イチモンジチョウ	スイカズラなど
18	コムラサキ	カワヤナギなどのヤナギ類
19	ヒメアカタテハ	ヨモギ、ゴボウ、ハハコグサなど
20	アカタテハ	ケヤキ、カラムシ、アカソなど
21	ゴマダラチョウ	エノキ類
22	ヒメウラナミジャノメ	チヂミザサ類、ススキ、シバ類
23	ヒメジャノメ	ススキ、イネ、エノコログサなど
24	ジャノメチョウ	ススキ、ヒカゲスゲなど
25	イチモンジセセリ	イネ、ススキ、エノコログサなど
26	チャバネセセリ	エノコログサ、ススキなど
27	オオチャバネセセリ	マダケ、メダケなど
28	コチャバネセセリ	マダケ、メダケなど
29	クロヒカゲ	マダケ、メダケなど
30	ヒカゲチョウ	マダケ、メダケなど

保全上重要な底生動物・陸上昆虫類

直轄管理区間を対象として実施される河川水辺の国勢調査（平成12年度底生動物調査・平成8年度陸上昆虫類調査）で確認された保全上重要な底生動物・陸上昆虫類は、以下に示すとおりである。

表 6-14 河川水辺の国勢調査（底生動物調査）で確認された保全上重要な底生動物

科名	種名	選定根拠
タニシ科	マルタニシ	「環境庁レッドリスト」 準絶滅危惧種
モノアラガイ科	コシダカヒメモノアラガイ	「環境庁レッドリスト」 情報不足
ヌマエビ科	ヌマエビ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 希少種
エゾトンボ科	キイロヤマトンボ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 危急種 「環境庁レッドリスト」 絶滅危惧 類
コオイムシ科	コオイムシ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 希少種 「環境庁レッドリスト」 準絶滅危惧種
	タガメ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 希少種 「環境庁レッドリスト」 絶滅危惧 類
ガムシ科	ガムシ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 希少種

表 6-15 河川水辺の国勢調査（陸上昆虫類調査）で確認された保全上重要な陸上昆虫類

科名	種名	選定根拠
モノサシトンボ科	オオモノサシトンボ	「環境庁レッドリスト」 絶滅危惧 類
マツムシ科	マツムシ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 希少種
バッタ科	ショウリウウバッタモドキ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 希少種
ヘリカメムシ科	ヘリカメムシ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 絶滅危惧種
カメムシ科	アカスジカメムシ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 希少種
アメンボ科	ハネナシアメンボ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 希少種
コオイムシ科	タガメ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 希少種 「環境庁レッドリスト」 絶滅危惧 類
セセリチョウ科	ギンイチモンジセセリ	「環境庁レッドリスト」 準絶滅危惧種
ヤガ科	ホソオビアシブクチャバ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 希少種
ガムシ科	ガムシ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 希少種
ハムシ科	オオルリハムシ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物〈動物編〉(茨城県版レッドデータブック)」 危急種 「環境庁レッドリスト」 情報不足

注) 環境庁レッドリストは平成12年4月に公表された無脊椎動物編を使用。
茨城県版レッドデータブックは平成12年3月に刊行された動物編を使用。

a. 底生動物



写真提供: 小菅次男氏

タニシ科
マルタニシ

環境省 RL
準絶滅危惧種
茨城県 RDB

比較的海に近い平野部の水田、池沼、潟、用水路などに多く生息する。



写真提供: 国土環境(株)

モノアラガイ科
コシダカヒメモノアラガイ

環境省 RL
情報不足
茨城県 RDB



写真提供: 国土環境(株)

ヌマエビ科
ヌカエビ

環境省 RL
茨城県 RDB
希少種

水路、湖沼、溜池や河川の上流から下流の水の流れの緩やかな水域に生息する。



写真提供: (株)環境調査技術研究所

エゾトンボ科
キイロヤマトンボ

環境省 RL
絶滅危惧 類
茨城県 RDB
危急種

河川中流の水底の砂礫や砂のくぼみ、泥の中などにうずくまって生活する。



写真提供: 小菅次男氏

コオイムシ科
コオイムシ

環境省 RL
準絶滅危惧種
茨城県 RDB
希少種

小川、谷津田、池沼、水田などの一般に流れの緩やかな浅い場所に生息している。



写真提供: 小菅次男氏

コオイムシ科
タガメ

環境省 RL
絶滅危惧 類
茨城県 RDB
希少種

池沼、水田にすみ、よく灯火にも飛来する。戦後の農薬大量使用によって激減した。



写真提供: (株)建設環境研究所

ガムシ科
ガムシ

環境省 RL
茨城県 RDB
希少種

浅くて水生植物がよく繁茂した池沼、川、用水路、水田、湿地などに生息している。

b. 陸上昆虫類



写真提供:小菅次男氏

モノサシトンボ科
オオモノサシトンボ

環境省 RL
絶滅危惧 類
茨城県 RDB

河川下流付近の河跡湖に依存して分布する。池沼、湖、水郷の溝などで見られる。



写真提供:国土環境株

マツムシ科
マツムシ

環境省 RL
茨城県 RDB
希少種

乾いた草地にすみ、草丈の中ほどに上って美しい鋭い声で鳴く。



写真提供:小菅次男氏

バッタ科
ショウリョウバッタモドキ

環境省 RL
茨城県 RDB
希少種

路傍や河原などの乾いた明るい草地にすみ、都市近郊の空き地などでも見られる。また、墓地のような、草刈などによる不安定な草原環境によくなじむ。



写真提供:小菅次男氏

カメムシ科
アカスジカメムシ

環境省 RL
茨城県 RDB
希少種

ヤブジラミなど各種のセリ科植物の種子上にみられ、しばしば多数が群がる。ニンジンを加害することもある。



写真提供:小菅次男氏

セセリチョウ科
ギンイチモンジセセリ

環境省 RL
準絶滅危惧種
茨城県 RDB

山地の草原、丘陵地、河原、堤防・道路や線路の法面などの日当たりのよいススキ草原を好む。気候的に樹林の発達が遅い場所や、人為的な管理によって遷移の振興が抑えられるなどの理由で乾性草原が維持されている場所が生息地となる。



写真提供:野中俊文氏

ハムシ科
オオルリハムシ

環境省 RL
茨城県 RDB
情報不足
危急種

6, 7月頃出現し、シロネを食草としている。



写真提供:(財)埼玉県生態系保護協会

アメンボ科
ハネナシアメンボ

環境省 RL
茨城県 RDB
希少種

池沼の浮き草の間にすみ、開けた水面には出てこない。

ヘリカメムシ科
ヘリカメムシ

環境省 RL
茨城県 RDB
絶滅危惧種

山地性で、フキ・マツムシソウ・オオダイコンソウなどに寄生している。

ヤガ科
ホソオビアシブトクチバ

環境省 RL

茨城県 RDB

希少種

低地性で、人家などの多いところによく見られる。年に2回(7月と9月)発生する。

5) 久慈川の両生類

久慈川流域は、上流から河口までの間に様々な水環境があり、多くの両生類がみられる。阿武隈淡水動物研究会による茨城県側の調査では6科13種が確認されたが、常陸大宮市（旧大宮町）の辰ノ口堰より下流の区域の調査では5科7種が確認された。流域の両生類の特徴としては、本流や支流の上流域にみられる広葉樹の森と、そこを流れる沢ではハコネサンショウウオやタゴガエルなどがみられること、上流域から中流域にかけての河原にはカジカガエルが確認できること、特に常陸大宮市（旧大宮町）より下流の丘陵地にはトウキョウサンショウウオの生息地が多いことなどがあげられる。しかし、サンショウウオ類やアカハライモリ、トウキョウダルマガエルやツチガエル、シュレーゲルアオガエル、カジカガエルなどは環境の変化によって減少しており、それらの保護対策が必要となっている。

表 6-16 久慈川水系（茨城県側）で確認された両生類

目名	科名	種名	備考
サンショウウオ目	サンショウウオ科	トウキョウサンショウウオ	
		ハコネサンショウウオ	
	イモリ科	アカハライモリ	
カエル目	ヒキガエル科	アズマヒキガエル	
	アマガエル科	ニホンアマガエル	
	アカガエル科	ウシガエル	国外外来種
		ニホンアカガエル	
		ヤマアカガエル	
		トウキョウダルマガエル	
		ツチガエル	
		タゴガエル	
	アオガエル科	カジカガエル	
		シュレーゲルアオガエル	

注：和名は、爬虫両棲類学会(2002)「日本産爬虫両生類の標準和名」に従った。この目録は、1986～2002年の阿武隈淡水動物研究会の調査に基づきとりまとめた。

(稲葉修氏調査資料をもとに作成)



写真提供:稲葉 修氏

トウキョウサンショウウオ
(サンショウウオ科)

全長は成体で13cmほど。関東地方と福島県の東南部に分布している。

久慈川水系では、主に標高200m以下の丘陵地に多く、3~4月に湧水のある池や湿地で産卵する。卵嚢は三日月型。

人里近くに生息するため、生息環境は開発行為の影響を受けやすく、近年各地で減少している。



写真提供:稲葉 修氏

ハコネサンショウウオ
(サンショウウオ科)

全長は成体で19cmほど。本州と四国に分布する。山間の渓流に幼生が、渓流周辺の森林に成体が生息している。産卵は5~6月に水源地の岩の下で行われるとされており、卵嚢の確認は困難である。

久慈川水系では、特に標高500m以上の山間に生息しているが、八溝山周辺や阿武隈山地の沢に多い。しかし、近年では林道開発による環境の変化によって減少している。



写真提供:稲葉 修氏

アカハライモリ
(イモリ科)

全長は最大で13cmほど。日本固有種で、本州から四国、九州に分布する。平地から山地の小川や池、沼に生息し、春から初夏に産卵が行われる。

久慈川水系では、かつては流域の水田や溜池、湿地などに数多く見られたというが、現在は環境の変化によって特に平野部で減少している。支流の山麓部に良好な生息地が残っているが、本種は腹部の模様だけでも差異があることが知られており、その生息地ごとの保護が必要とされている



写真提供:稲葉 修氏

トウキョウダルマガエル
(アカガエル科)

体長は雄で7.5cm、雌で8.5cmほど。関東地方から東北地方にかけてと、新潟県と長野県の一部に分布する。特に平野部の水田に多く、4~7月に水田で産卵する。

久慈川水系では、かつて流域の水田に数多く生息していたが、圃場整備事業等の影響によって激減している。

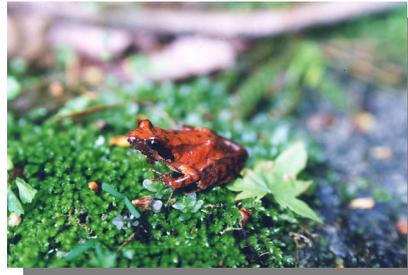


写真提供: 稲葉 修氏

ツチガエル
(アカガエル科)

体長は雄で 4.5cm、雌で 6cm ほど。本州から四国、九州に欠けて分布する。平地から山地の水田や水路、湿地などに生息しており、初夏から夏にかけて産卵する。

久慈川水系では、流域の水田から山地の湿地などにかけて広く見られるが、近年では圃場整備事業等の影響をうけて特に平野部の水田周辺からは減少している。



写真提供: 稲葉 修氏

タゴガエル
(アカガエル科)

体長 5.5cm 前後。本州と四国、九州に分布する。山地に生息し、4~5月、小渓流沿いの水の湧き出るガレ場や岩の隙間で産卵する。

久慈川水系では、本流沿いでは特に常陸大宮市山方以北の沢に生息するが、山田川や里川に注ぐ沢からも確認できる。



写真提供: 稲葉 修氏

カジカガエル
(アオガエル科)

体長は雄で 4.5cm、雌で 8cm ほど。本州から四国、九州に分布する。主に丘陵地から山地を流れる河川とその周辺の森林に生息している。4~7月に河川中の石の下などで産卵する。

久慈川水系では、以前は多くの支流に生息していて、本流では常陸大宮市以北にも広い範囲に見られた。しかしながら、環境の変化によって現在では特に、本流や人里近くを流れる支流において減少している。



写真提供: 稲葉 修氏

シュレーゲルアオガエル
(アオガエル科)

体長は雄が 4cm、雌が 5.5cm ほど。本州、四国、九州に分布する。平野部から丘陵地の水田や湿地などに生息する。産卵期は4~6月で、水田の畦や土手に穴を掘り、直径 8cm 以下の泡状の卵塊を産む。

久慈川水系流域の水田では、かつてはよく見られたというのが、現在は多くの地点で激減している。

6) 久慈川の爬虫類

上流域から河口まで、環境の変化に富んだ久慈川流域から様々な爬虫類の生息が確認されている。阿武隈淡水動物研究会による1986年から2002年の調査では、5科12種が確認された。また、常陸大宮市の辰ノ口堰より下流の区域における調査では3科7種が確認された。流域の爬虫類の特徴としては、茨城県内に分布するトカゲ類やヘビ類の在来種すべてが確認されていることや、県内での確認情報の少ないタチホヘビやシロマダラの生息報告がされている地域であることなどがあげられる。しかし、主食となる小動物の減少のためか、地中のネズミ類を食べるジムグリや、カエルやオタマジヤクシなどを食べるヒバカリなどの姿をあまり見かけなくなった地域もある。また、ニホンカナヘビが普通種である反面、ニホントカゲは多くの地域で少なくなっている傾向がみられる。なお、カメ類については、国外外来種のアカミミガメの他にクサガメを確認しているが、クサガメは古い時代に西日本から移殖された国内外来種である可能性がある。

表 6-17 久慈川水系で確認された爬虫類

目名	科名	種名	備考
カメ目	ヌマガメ科	クサガメ	国内外来種
		ミシシippアカミミガメ	国外外来種
トカゲ目	トカゲ科	ニホントカゲ	
	カナヘビ科	ニホンカナヘビ	
	ナミヘビ科	タチホヘビ	
		ヒバカリ	
		シロマダラ	
		アオダイショウ	
		ジムグリ	
		シマヘビ	
		ヤマカガシ	
	クサリヘビ科	ニホンマムシ	

注：学名や和名は、爬虫両棲類学会(2002)「日本産爬虫両生類の標準和名」に従った。この目録は、1986～2002年の阿武隈淡水動物研究会の調査に基づきとりまとめた。

(稲葉修氏調査資料をもとに作成)



写真提供: 稲葉 修氏

ニホントカゲ
(トカゲ科)

全長は20~25cmほど。日本各地に分布する。平地から丘陵地にかけて生息するが、山間の人家庭先にも姿をあらわす。初夏の頃に石の下の隙間や草地の巣穴で卵を産む。

久慈川流域では草地や人家周辺に見られるが、以前と比較すると減少している。



写真提供: 稲葉 修氏

ニホンカナヘビ
(カナヘビ科)

全長は18~25cm。日本各地に分布している。平野部から丘陵地に多く、山間の人家庭先でも確認することができる。初夏から夏にかけてが産卵期であり、草の根元などで卵を産む。

久慈川流域では、人家周辺にて比較的普通に見られる、最も身近な爬虫類である。



タカチホヘビ
(ナミヘビ科)

全長は最大で60cmほど。本州、四国、九州に分布する。地中性であり発見されることは少ない。現在までの発見は山間部での例が多い。本種のウロコは盛り上がり、光沢があって、光の加減によって虹色の光沢となる。

久慈川流域では、八溝山や常陸大宮市にて数匹が確認されているだけであるが、流域の山間では多くの地域に普通に生息しているものと思われる。



写真提供: 稲葉 修氏

シロマダラ
(ナミヘビ科)

全長は最大で70cmほど。北海道から本州、四国、九州に分布するほか、伊豆大島や佐渡島、屋久島などの島々にも見られる。白と黒の模様があるヘビで、平野部から山地に至るまで生息している。

久慈川流域での確認例は少ないが、流域各地では白と黒の色彩をもつヘビの確認情報があり、本種は久慈川流域に広く分布しているものと考えられる。



写真提供: 稲葉 修氏

ジムグリ
(ナミヘビ科)

全長100cmになる。北海道から本州、四国、九州、そして屋久島や種子島にまで分布する。主に山地に多いが、山間部では人家の庭先にも姿をあらわす。

久慈川流域では、山間部に比較的多く見ることができたが、現在では多くの場所で以前よりも確認することが少なくなっているようである。



写真提供: 稲葉 修氏

ニホンマムシ
(クサリヘビ科)

全長60cm前後になる。北海道から本州、四国、九州、そして五島列島や屋久島などにも分布する。毒ヘビとして知られており、丘陵地から山地の湿地や水田周辺などに生息している。

久慈川流域には河口部周辺をのぞいて広く生息しており、河川沿いの河岸段丘の斜面の湧水地の周りなどにも多い。

7) 久慈川の哺乳類

久慈川本川の下流域ではハタネズミ、ハツカネズミが見られる。クサヨシが密生し、人の進入が少ない箇所では、タヌキ、イタチがみられる。

直轄管理区間を対象として実施された河川水辺の国勢調査（平成13年度）では、哺乳類は8種であった。

面積の大きな樹林を必要とするような哺乳類はみられず、残された樹林地を中心に、河川敷の他、農地などの人為的環境も利用することができる哺乳類が生息していた。

表 6-18 河川水辺の国勢調査（両生類・爬虫類・哺乳類調査）で確認された哺乳類

目名	科名	種名
モグラ目	トガリネズミ科	ジネズミ
	モグラ科	アズマモグラ
ウサギ目	ウサギ科	ノウサギ
ネズミ目	ネズミ科	アカネズミ
		カヤネズミ
ネコ目	イヌ科	タヌキ
		イタチ
	ジャコウネコ科	ハクビシン

（「平成13年 河川水辺の国勢調査（両生類・爬虫類・哺乳類調査）」より作成）

保全上重要な哺乳類

直轄管理区間を対象として実施されている河川水辺の国勢調査(両生類・爬虫類・哺乳類動物調査)で確認された保全上重要な哺乳類は、以下に示すとおりである。

表 6-19 河川水辺の国勢調査(両生類・爬虫類・哺乳類調査)で確認された
保全上重要な哺乳類

科名	種名	選定根拠
ネズミ科	カヤネズミ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物<動物編>(茨城県版レッドデータブック)」希少種

注) 茨城県版レッドデータブックは平成 12 年 3 月に刊行された動物編を使用。
カヤネズミは、茨城県版レッドデータブックでは『ホンシュウカヤネズミ』の和名で記載されている。



写真提供:(財)埼玉県
生態系保護協会

ネズミ科
カヤネズミ

環境省 RL

茨城県 RDB

希少種

イネ科植物の優占する草地、河川敷、堤防、麦畑などに生息するが、低地の草地、水田、休耕田、沼沢地などのイネ科植物が密生した水気のあるところに多い。

